新見公立大学紀要　第38巻2号
pp. 35－40, 2018

原　著

説明行動と罪悪感・羞恥感情との関連性

－青年期女子を対象とした検討－

芝﨑　美和[1)]*・芝﨑　良典[2)]

1）新見公立短期大学幼児教育学科　2）東大阪大学

（2017年12月20日受理）

本研究の目的は、罪悪感、羞恥感情と説明行動（concession, excuse, justification, denial）との関連性を検討することであった。調査対象者は、説明行動に関する4つの課題と、罪悪感、羞恥心各尺度に回答するよう求められた。分析の結果、説明行動と関連するのは罪悪感のみであることが明らかにされた。中でも“concession”と他傷場面での罪悪感との関連性が確認され、他者を直接的に傷つける場面で罪悪感を認識する者ほど、concessionを選択することが示された。さらに、“denial”と他者への負い目場面とが関連することも示され、他者への負い目から罪悪感を認識しやすい者ほど、加害場面において自己の加害行為を否定することが明らかとなった。

（キーワード）説明行動、罪悪感、羞恥感情

Ⅰ．問題と目的

説明行動とは、失敗に対処するための言語的方略である[1)]。その内容は以下の4つに大別される[2)]。第1に、謝罪に代表される“concession（加害事実の容認）”である。これには、責任の受容、後悔の念の表出、補償の提供の意志などが含まれる。第2に、“excuse（言い訳）”である。この方略を選択する加害者は、加害事実は認める。しかし、結果の予見の困難さや加害意図のなさ、制御不能の事態という要素を主張することで、加害行為に対する責任を軽減しようと努める点において、concessionを選択する加害者とは異なる。第3に、“justification（正当化）”である。加害事実については認めるが、被害の程度が小さいことを主張したり、加害行為に至らせた避けられない要件を主張することによって、行為を正当化しようとするものである。最後に、“denial（否定）”である。加害事実をまったく認めない、加害行為への関与を否定する、あるいはすべての責任を他者に押しつけるという行為がこの方略には含まれる。

これら4つのうち、concessionとexcuseは、被害者の怒りや悲しみの感情を和らげる方略である[3)]。これらの方略には、被害者など、加害行為を責め非難する人物が加害行為を正しく解釈することを助け、また、彼らが責める権利を有することを加害者が確認するという意味がある。したがって、当事者間の葛藤を軽減する方略であるといえる。他方、justificationとdenialは、加害行為を目撃した他者の意見を否定したり、自分は責められる覚えはないと主張する方略であることから、当事者間の葛藤をよりエスカレートさせる方略であるといえよう[3)]。

加害場面における方略選択に影響する要因としては、主に以下の2つがあげられる。1つ目は、効果の予測である。例えば、concessionの代表例である謝罪については、加害者が謝罪することで、被害者の怒りの感情は大きく緩和されることが明らかにされている[4)]。また、謝罪には、他者からの罰を回避する効果、被害者から許しを得られる効果、悪化した自己の印象やアイデンティティを回復する効果があり[5)、6)]、加害者は、このような効果を期待して謝罪することがある。

このような謝罪の効果の程度は、加害者の特性や被害状況によって異なる。例えば、Darby & Schlenker[6)]によると、被害者の抱く加害者の印象が悪いほど謝罪効果は小さくなる。また、同じ違反を犯したとしても、被害が小さいときほど謝罪効果は大きい[5)]。このように、加害者は謝罪の際、謝罪の効果や、種々の要素が効果の程度を左右することを認識しているものと思われる。謝罪に限らず、加害者は各方略の効果を予測した上で方略を選択、実行すると考えられる。

方略の選択に影響する2つ目の要因は、道徳性である。中でも、他者に被害を与える場面において加害者が認識すると推察されるのは、罪悪感と羞恥感情である。罪悪感とは、加害者に生じる、加害行動に対する緊張や自責の念、後悔を含む感情である[7)]。罪悪感を認識している加害者の最大の関心事は自らの犯した行為であり、しなければよかった、行為を取り消したいという思いと関連して、被害者に対し他者志向的な共感性を示す[8)]。また、罪悪感には、矯

*連絡先：芝﨑美和　新見公立短期大学幼児教育学科　718-8585　新見市西方1263-2

正的な行動を動機づけ、罪の告白や謝罪、補償願望を生じさせる役割がある[7)、9)、10)]。このように、罪悪感とは、加害行為や被害結果に着目した結果生じるより道徳的な感情である。

罪悪感が他者志向的感情であるのに対し、羞恥感情は自己志向的感情であるとされる[8)、11)、12)]。それゆえ、加害行為の後に罪悪感ではなく羞恥感情が生じた場合は、共感的な感情の喚起が妨害される[8)、11)、12)]。羞恥感情は、防衛的反応や報復的反応を生じさせるという特徴を持つとされている[7)、9)、10)、13)]。このように、罪悪感と羞恥感情はともに、加害行為の後に加害者に生じうる感情であるが、他者志向的/自己志向的という異なる特性を持つ。このような罪悪感と羞恥感情の違いについては、主に児童期から青年期にかけた検討が続けられている。

罪悪感と羞恥感情の識別は幼児期の子どもには困難である。5・6歳児であっても、両者が生起する出来事を詳述することは難しい[14)]。8歳頃になると、行動への帰属と特性への帰属が区別されるようになり、それに伴って、罪悪感と羞恥感情が生起する状況を区別できるようになる[15)]。Ferguson[15)]によると、児童は、違反後に罪悪感を認識する理由として道徳規範（補償の必要性、違反がもたらす結果など）を、他方、羞恥感情を認識する理由としては他者の存在（違反発覚の恐れ、被害者の存在など）を多くあげる。また、罪悪感がより喚起されやすいのは、加害行為が意図的であった場合であるのに対し、羞恥感情が喚起されやすいのは、他者の反応が軽蔑や嘲笑を含む無理解なものであるときだという。

罪悪感と羞恥感情の差異は青年の認識においても見られる。有光[16)]は、青年が罪悪感を経験する状況には、「他傷」、「他者への配慮不足」、「利己的行動」、「他者への負い目」の4状況があることを見出した。一方、羞恥感情に関しては、「かっこの悪さ」、「気はずかしさ」、「自己不全感」、「性」の4側面があることが明らかにされている[17)]。このように、罪悪感と羞恥感情は質的に異なる感情であり、加害後の説明行動との関連性の程度にも違いが見られると予測される。そこで本研究では、罪悪感・羞恥感情と説明行動との関連性について検討する。

本研究における仮説は以下の3点である。罪悪感は羞恥感情に比べ、共感的感情を喚起させやすい[8)]。したがって、2つの感情の中でも罪悪感が説明行動と関連し、特に、説明行動の中でも責任の受容や後悔の念という要件を持つconcessionとの間に関連性が見られるであろう（仮説1）。また、特に人を傷つける場面、すなわち他傷場面において罪悪感を感じる者は、concessionを選択するであろう（仮説2）。他方、他者からの評価懸念が強い者は、他者への負い目から罪悪感を認識するあまり、加害行為への関与を否定し、したがってdenialを選択する可能性がある（仮説3）。

Ⅱ．方法

1．調査対象者　大学生93名（男子1名、女子92名）を対象とし、2017年11月中旬に調査を実施した。

2．調査の概要　調査は集団的に実施され、所要時間は約10分であった。調査紙は、講義終了後に配布され、回収された。回収率は100％であった。なお、調査対象者のうち3名については回答に不備が見られたため、以降の分析対象から除外した。

3．質問紙の構成

1）説明行動についての質問項目

調査対象者には4つの課題が提示された。4つの課題（コーヒー課題、サイクリング課題、大学課題、ダンス課題）は、Fukuno & Ohbuchi[18)]が使用した課題の中から採用した。いずれの課題も、主人公が意図せず他者に被害を与えるという内容を描いたものである（例：＜大学課題＞Aさんは授業を欠席したDさんに、提出課題の内容を伝えたが、正しいと思って伝えたその情報は実は誤ったものであり、そのためにDさんは教員に叱責される）。

また、説明行動については従来の研究において用いられてきた4行動（concession/apology, excuse, justification, denial）を採用した。なお、concessionについては、謝罪行動が取り上げられることが多いことから、以下、apologyとして扱うこととする。調査対象者は、各課題文を読んだ後、4つの説明行動をどの程度行うかについて回答するよう求められた。Apologyとは、違反や他害行為についての責任の受容と罪悪感を反映した行動であり（例：「すべて私の責任だ。申し訳ないことをした。」）、excuseとは、制御不能な事態であったことを主張することで、責任の一部を回避しようとする行動である（例：「こんなところに段差があるとは思わなかったんだ。」）。また、justificationとは、被害の小ささを主張する行動である（例：「そんなにひどく叱られなくてよかった。」）。それに対し、denialとは、他害行為そのものを否定する行動を指す（例：「私はそんなこと言っていない。」）。なお、これらの説明行動の内容はすべて、Fukuno & Ohbuchi[18)]に基づくものである。回答は「1. まったく当てはまらない」から「7. 非常に当てはまる」までの7件法で求めた。

2）罪悪感喚起状況尺度

罪悪感に関しては、有光[16)]の罪悪感喚起状況尺度を用いた。この尺度は、罪悪感が喚起される状況について、他傷（8項目）、他者への配慮不足（9項目）、利己的行動（12項目）、他者への負い目（8項目）の4側面から捉えるものである。回答は「1. 全く感じない」から「4. 非常に感じる」までの4件法で求めた。

3）羞恥感情についての質問項目

羞恥感情については、成田ら[17)]の状況別羞恥感情質問紙を用いた。成田ら[17)]は、羞恥感情が喚起する状況について

「かっこの悪さ」、「気恥ずかしさ」、「自己不全感」、「性」の4側面から検討している。成田ら[17]によると、「かっこの悪さ」は、公衆の面前で自己の劣位性が明らかにされた場面、「自己不全感」は、自己の行動を反省する場面における羞恥感情についてのものである。他方、「気恥ずかしさ」は、異性との相互作用や他者からの注目を得ることによる対人緊張、照れ、対人困惑に関する場面、「性」は性的トピックスを扱う場面における羞恥感情についてのものである。これらのうち、違反場面での加害者の羞恥感情は、自己の行為を内省したり、複数の他者からの否定的注目を認知することによって生じるものである。そのため、本研究では、「かっこの悪さ」下位尺度19項目と「自己不全感」下位尺度16項目から成る羞恥感情尺度を使用することとした。回答は「1. 全く感じない」から「4. 非常に感じる」までの4件法で求めた。

倫理的配慮　調査実施前に、調査は任意であること、個人情報の保護に努めること、また、調査参加の有無が成績等に影響しないことを説明した。回答をもって調査への参加の同意が得られたものとした。

Ⅲ．結果

1．罪悪感尺度および羞恥感情尺度の信頼性の確認

本研究では、罪悪感尺度については、有光[16]に倣い4下位尺度を採用した。記述統計の結果をTable 1に示す。4下位尺度についてクロンバックのα係数を算出したところ、いずれの下位尺度に関しても高い信頼性が確認された（他傷：α = .81、他者への配慮不足：α = .87、利己的行動：α = .84、他者への負い目：α = .80）。羞恥感情に関しては、本研究では、成田ら[17]の状況別羞恥感情質問紙を構成する4下位尺度のうち、かっこの悪さ下位尺度、自己不全感下位尺度を以て羞恥感情尺度とした。各下位尺度についてクロンバックのα係数を算出した結果、いずれについても高い信頼性を確認することができた（かっこの悪さ：α = .86、自己不全感：α = .90）。

Table 1　罪悪感喚起状況尺度得点と羞恥感情尺度得点の記述統計量

		平均値	標準偏差
羞恥感情	かっこ悪さ	3.13	.44
	自己不全感	3.05	.54
罪悪感	他傷	3.66	.40
	他者への配慮不足	3.43	.49
	利己的行動	3.04	.52
	他者への負い目	3.35	.49

2．罪悪感・羞恥感情と説明行動との関連性

まず、apology、justification、excuse、denialについての各回答を得点化し、4課題（コーヒー課題、サイクリング課題、大学課題、ダンス課題）の得点を足し合わせたものをapology score、justification score、excuse score、denial scoreとした。説明行動と罪悪感・羞恥感情との関連を検討するために、各説明行動得点を目的変数、罪悪感尺度の4下位尺度得点と羞恥感情尺度の2下位尺度得点を説明変数とした重回帰分析（ステップワイズ法）を実施した。その結果、apology score、denial scoreに関しては、罪悪感・羞恥感情の下位尺度のうちの一部と有意な関連を示すことが明らかになった（Table 2）。

まず、apology scoreを目的変数とした重回帰分析の結果、重相関係数が有意であり、罪悪感尺度の中の他傷得点との正の関連性が有意であった（β = .35 , p < .05）。羞恥感情に関しては、いずれの下位尺度得点も有意な関連を示さなかった。

次に、denial scoreを目的変数とした重回帰分析の結果、重相関係数は有意であり、他者への負い目得点は有意な正の関連を示した（β = .38 , p < .05）。Apology scoreと同様、羞恥感情の各下位尺度得点は有意な関連を示さなかった。

Excuse score、justification scoreに関しては、罪悪感、羞恥感情ともに、すべての下位尺度得点との間に有意な関連性は確認されなかった。

3．罪悪感と羞恥感情の相関関係

罪悪感および羞恥感情の各下位尺度について得点間との関連性をピアソンの積率相関係数を用いて検討した。結

Table 2　説明行動と罪悪感・羞恥感情との関係性

		説明行動							
		apology		justification		excuse		denial	
		r	β	r	β	r	β	r	β
羞恥感情	かっこ悪さ	.32**	.01	.16	.13	-.14	-.01	-.11	.19
	自己不全感	.41**	.09	.13	-.03	-.22*	-.11	-.25*	-.16
罪悪感	他傷	.56**	.35*	.09	-.02	-.25*	.06	-.38**	-.23
	他者への配慮不足	.53**	.20	.10	-.01	-.30**	-.45+	-.38**	-.31
	利己的行動	.48**	.16	.12	-.01	-.20	.18	-.33**	-.22
	他者への負い目	.41**	-.18	.17	.21	-.23*	.02	-.22*	.38*
	(df)		(6, 83)		(6, 83)		(6, 83)		(6, 83)
	F値		7.22**		.63		1.64		3.80**
	R^2		.30		-.03		.11		.13

**p < .01　*p < .05　+.05 < p < .10

Table 3　罪悪感喚起状況尺度と羞恥感情尺度の相関係数

		羞恥感情		罪悪感			
		かっこ悪さ	自己不全感	他傷	他者への配慮不足	利己的行動	他者への負い目
羞恥感情	かっこ悪さ	−	.70**	.44**	.42**	.52**	.43**
	自己不全感		−	.56**	.58**	.63**	.59**
罪悪感	他傷			−	.85**	.67**	.71**
	他者への配慮不足				−	.80**	.83**
	利己的行動					−	.77**
	他者への負い目						−

**$p < .01$

果をTable 2に示す。分析の結果、すべての下位尺度得点間で中程度以上の相関が確認された。

Ⅳ．考察

本研究の目的は、罪悪感、羞恥感情と説明行動との関連性について検討することであった。分析の結果、説明行動との関連性が示されたのは罪悪感のみであることが示され、したがって、説得行動の中でもconcessionは罪悪感と関連するであろうという仮説1は支持された。また、concessionと関連するのは、とりわけ他傷場面で罪悪感を認識する者であるという結果が得られ、他傷状況での罪悪感とconcessionが関連するであろうという仮説2も支持された。さらに、他者への負い目場面での罪悪感とdenialとの関連性が確認され、このことから、他者からの評価懸念が強い者は、他者への負い目から罪悪感を認識するあまり、加害行為への関与を否定し、denialを選択するであろうという仮説3も支持された。

罪悪感は、苦痛を伴う共感的反応であり[7)、19)]、違反後の謝罪を動機づける感情である[7)、9)、10)]。他傷場面で罪悪感を認識する者は、説明行動として謝罪を選択するという本研究の結果は、Lewis[7)]らの見解を支持するものであるといえる。

このような罪悪感に規定される謝罪は、誠実な謝罪とよばれる。謝罪には、誠実な謝罪と道具的謝罪がある[20)、21)、22)、23)]。2つの謝罪には、罪悪感を伴うか否かという大きな相違がある。罪悪感に規定された謝罪が誠実な謝罪、罪悪感を伴わず、他者からの罰や拒否の回避、許容の獲得、ネガティブな印象の改善、傷ついたアイデンティティの回復などを目的とした謝罪が道具的謝罪である[22)、23)]。加害場面で生じた罪悪感は、予期的罪悪感として、類似した場面で加害行動を抑制する働きをもつ[19)]。つまり、他傷場面において、被害者への共感性から高い罪悪感を喚起する者は、類似した加害場面でも同じように被害者に対する共感性を喚起させ、それによって生じた罪悪感から誠実な謝罪を選択するといえよう。

さらに、本研究では他者の負い目場面における罪悪感がdenialと関連することが明らかとなった。有光[16)]によると、他者の負い目場面における罪悪感は公的自己意識と関連している。公的自己意識の高い人とは、他者からの評価に対する懸念意識が強く[24)]、他者の評価を考慮した上で感情や意見の表出方法を決定する傾向がある[25)]。他者への負い目から高い罪悪感を認識する者は、このような公的意識の強く持つために、加害行為によって他者からネガティブな評価がもたらされる事態を避けたいと考え、加害行為への関与そのものを否定する傾向にあるのではないかと考えられる。

本研究では羞恥感情に関しては、説明行動との関連性は確認されなかった。羞恥感情は自己志向的感情であるため、共感的な感情の生起を妨害する[11)、12)]。Concessionと羞恥感情との間に関連が見られなかったのはそのためであろう。しかしながら、加害行為そのものを否定するdenialや、加害事実は認めるが責任を軽減しようとするexcuse、justificationが羞恥感情と関連しなかった点については疑問が残る。羞恥感情が、防衛的反応や報復的反応を生じさせるものであるなら[7)、9)]、責任の軽減に基づく3つの行動を加害者から引き出す可能性がある。この点については今後の検討課題である。

今後の課題

本研究では、罪悪感と羞恥感情という道徳特性が説明行動と関連するか否かについて検討した。一方で、加害行為後に、罪悪感や羞恥感情が実際にどの程度喚起されるかについては確認していない。特性としての罪悪感、羞恥感情と、加害行為後に生じる罪悪感、羞恥感情との間に差異は生じるのか、またその差異によって説明行動がどのような影響を受けるかについては今後検討する必要がある。

また、本研究における調査対象者には性別の偏りが見られる。本研究で得られた知見が性別による影響を受けるか否かについても、今後検討する必要がある。

4つの説明行動のうち、人間関係の修復に最も効果があるのはconcessionであろう。本研究では、そのconcessionに罪悪感が関係することが確認された。罪悪感は本来、対人関係における違反への関心から生じるものであり、他者との社会的結びつきが分裂するのを避けたいという加害者の思いと関係している[26)]。この点で、罪悪感には対人機能が備わっているといえよう。しかし、一方で、罪悪感には

自己懲罰の機能もあり[19]、強すぎる罪悪感は精神的健康にマイナスの影響をもたらす可能性がある。このような事態を防ぐためにも、罪悪感は被害者への真の共感性から生じるという、罪悪感の適応機能について検討していく必要がある。

文献

1）Shonbach, B. R. （1980）. A category system for account phases. *European Journal of Social Psychology*, **10**, 195-200.

2）Goffman, E.（1971）. *Relations in public: Microstudies of the public order*. New York: Basic Books.

3）McLaughlin, M. L., Cody, M. J., & O'Hair, H. D. （1983）. The management of failure events: Some contextual determinants of accounting behavior. *Human Communication Research*, **9**, 208-224.

4）Ohbuchi, K., Kameda, M., & Agarie, N. （1989）. Apology as aggression control: Its role in mediating appraisal of and response to harm. *Journal of Personality and Social Psychology*, **56**, 219-227.

5）Darby, B. W., & Schlenker, B. R. （1982）. Children's reactions to apologies. *Journal of Personality and Social Psychology*, **43**, 742-753.

6）Darby, B. W., & Schlenker, B. R. （1989）. Children's reactions to transgressions: Effects of the actor's apology, reputation and remorse. *British Journal of Social Psychology*, **28**, 353-364.

7）Lewis, M.（1971）. *Shame and guilt in neurosis*. New York: International Universities Press.

8）Leith, K. P., & Baumeister, R. F. （1998）. Empathy, shame, guilt, and narratives of interpersonal conflicts: Guilt-prone people are better at perspective taking. *Journal of Personality*, **66**, 1-37.

9）Lindsay-Hartz, J.（1984）. Contrasting experiences of shame and guilt. *American Bahavioral Scientist*, **27**, 689-704.

10）Tangney, J. P.（1993）. *Shame and guilt, in Symptoms of Depression*, In C. G. Costello（Ed.）,（pp. 161-180）. New York: Wiley.

11）Tangney, J. P. （1991）. Moral affect: The good, the bad, and the ugly. *Journal of Personality and Social Psychology*, **61**, 598-607.

12）Tangney, J. P.（1995）. Recent empirical advances in the study of shame and guilt. *American Behavioral Scientist*, **38**, 1132-1145.

13）Tangney, J. P., Miller, R. S., Flicker, L., & Barlow, D. H. （1996）. Are shame, guilt and embarrassment distinct emotions? *Journal of Personality and Social Psychology*, **70**, 1256-1269.

14）Harris, P.L., Olthof, T., Terwogt, M. M., & Hardman, C. E. （1987）. Children's knowledge of the situations that provoke emotion. *International Journal of Behavioral Development*, **10**, 319-343.

15）Ferguson, T. J., & Stegge, H., & Damhuis, I. （1991）. Children's understanding of guilt and shame. *Child Development*, **62**, 827-839.

16）有光興記.（2002）. 日本人青年の罪悪感喚起状況の構造. *心理学研究*, **73**, 148-156.

17）成田健一・寺崎正治・新浜邦夫.（1990）. 羞恥感情を引き起こす状況の構造：多変量解析を用いて. *人文論究*, **40**, 73-92.

18）Fukuno, M., & Ohbuchi, K.（1998）. How effective are different accounts of harm-doing in softening victims' reactions? A scenario investigation of the effects of severity, relationship, and culture. *Asian Journal of Social Psychology*, **1**, 167-178.

19）Hoffman, M. L. （2000）. Empathy and moral development : Implications for caring and justice. Cambridge University Press. 菊池章夫・二宮克美（訳）（2001）. *共感と道徳性の発達心理学－思いやりと正義とのかかわりで*. 川島書店.

20）Petrucci, C. J.（2002）. Apology in the criminal justice setting: Evidence for including apology as an additional component in the legal system. *Behavioral Science and the Law*, **20**, 337-362.

21）Wagatsuma, H., & Rosett, A. 1986 The implications of apology: Law and culture in Japan and the United States. *Law and Society Review*, **20**, 461-507.

22）中川美和・山崎晃.（2004）. 対人葛藤場面における幼児の謝罪行動と親密性の関連. *教育心理学研究*, **52**, 159-169.

23）中川美和・山崎晃.（2005）. 幼児の誠実な謝罪に他者感情推測が及ぼす影響. *発達心理学研究*, **16**, 165-174.

24）Fenigstein, A. （1979）. Self-consciousness, self-attention, and interaction. *Journal of Personality and Social Psychology*, **37**, 75-86.

25）Scheier, M. F. （1980）. Effects of public and private self-consciousness on the public expression of personal beliefs. *Journal of Personality and Social Psychology*, **39**, 514-521.

26）Baumeister, R. F., Stillwell, A. M., & Heatherton, T. F. 1994 Guilt: An interpersonal approach. *Psychological Bulletin*, **115**, 243-267.

Effects of shame and guil on accounts in adolescence

Miwa Shibasaki Yoshinori Shibasaki

Niimi College, 1263-2 Nishigata, Niimi, Okayama 718-8585, Japan

Summary

This study was conducted to examine the relationships between guilt, shame feeling and explanatory behavior (concession, excuse, justification, denial). The participants (N=93) were given four tasks related to explanatory behavior and guilt and shame feelings. Our results revealed that only guilt feelings are related to explanatory behavior. In particular, the association between "concession" and guilt feelings in other scratching scenes was confirmed, and it was shown that those who recognize guilt feelings in scenes directly hurting others are more likely to choose concessions. Furthermore, it is shown that "denial" is related to the negative scene to other people, and it is clear that those who can easily perceive guilt from the negative attitude toward others are denying their own acts of perpetration in the scene of adultery became.

Key words: account, guilt, shame